

## 巻頭言

# 「こころ豊かで潤いのある郷土づくり」

山形経済同友会代表幹事 清野 伸 昭



創立三十周年を超えた山形経済同友会の基本理念の一つに「われわれはふるさとの美しい自然と、縄文を源とする文化を愛し、それを守り育てるとともに、精神性の高い、潤いのある地域社会づくりに向けて発信し、行動する」がある。その具体的な活動として昭和六十三年にスタートした「美しい街並み賞」があり、五回の顕彰のあと平成五年から昨年まで「やまがた景観デザイン賞」として、県内各市町村や団体の景観に対する認識を高めることに大きなインパクトを与えてきた。

戦後、経済効率をひたすら追い求めてきた結果、全国の郊外やロードサイドに展開するショッピング群に、地域の暮らしに息づく文化ともいえる景観が均質化されてしまった。高度成長時の経済活動に景観秩序を維持する努力が埋没してしまったともいえる。

大店法も景観には全く無頓着で、ヨーロッパの商業立地に関する法が商業と街づくりの関係を重視しているのとは対照的に、大型店と中小小売店の利害の調整にのみ目が向けられてしまった。現在の大型立地法も廃棄物や騒音などの環境問題に考慮のあとはみられるが、景観についての配慮までは及んではない。

このような時代の流れの中で、「松山城とその周辺」「山居倉庫とケヤキ並木」の歴史的景観に加え、「山寺芭蕉記念館及び山寺風雅の国」や「伝国の杜」のように景観を意識した新しい多くの建造物も賞の対象にしてきたことは、関係してこられた方々の見識に敬意を表するとともに、山形経済同友会の顕著な活動が示した財産でもある。今年度からは、新たに「人為的活動によって保全され、時の流れの中で一層向上された自然や建造物など、地域の個性を豊かに表現した景観で、時代に残す価値のあること」などを主に変更し「次代につなぐやまがた景観賞」と事業の名称を変えてスタートした。本年は「いい中津川白川湖周辺」が大賞に選ばれた。各地区の関心も年々高まり、自薦他薦の応募が増加の一方で嬉しく思っている。

従来型の発想は、そのものが直ぐ経済効果に結びつくかどうかを基準にしがちであったが、これからは金で買えるモノよりも、金で買えない人の心や知恵の方が高い価値を持つ時代になり、豊かさを実感させるものではないだろうか。

構造改革がすべてに優先する議論が盛んであるが、平凡な日常生活の中には長い間培われてきた考慮すべき秩序がある。少子高齢化や教育水準の低下、犯罪の増加等社会各面での劣化が目立ち、日常生活環境の清潔感が失われつつあるのも確かである。地域の現状を表現するものの一つが景観であると思う。幸い山形には色彩豊かな四季があり、縄文の香り高い精神文化が根づいている。

国土交通省も、「美しい国づくり政策大綱」を発表した。公共工事にも美しさの視点を入れ、湾岸や道路の整備をする時にも、周辺の風景と調和するように定める「景観アセスメント（事前影響評価）」の導入を決めた。道路等の整備に当たってコンピュータグラフィックスで作った完成後の景観予想図を、地元住民や有識者に提示、意見を聞きながら進めようという新施策である。

貴重な歴史的な街並みの保存や街の景観を損ねる電線地中化等公共工事の面からも期待されており、来年度には景観基本法の策定も目指している。歴史的建造物、伝統的街並みや自然環境の保全には一歩前進がみられるが、私的な生活空間における景観までは、価値観に個人差もありこれからの課題と思う。

個人レベルの空間の中で、景観を遮るものに街に氾濫する看板、ケバケバしい色の広告物や建造物がある。条例等で規制の対象にはなっているが、落ち着いた街並みが形成されていく中で、自然に淘汰されていくものと思う。

景観一つを大切にすることが、コストが高いものであっても、そこに住む人々のこころの豊かさに結びつくものであれば、潤いのある美しい日本がいたるところで発見されるに違いない。